

日韓における文化財の保存活用に関する一考察—古代碑・史跡整備・博物館を中心に—

埋蔵文化財担当2 主任学芸員 藤守崇洋

はじめに

高崎市では、山積する行政課題の解決に向けて、国内だけでなく海外における事例を比較・研究し、政策立案に繋げることなどを趣旨とする「姉妹都市等海外派遣研修」（以下、本研修）を実施している。本研修は、参加者自身が研修テーマを設定し、訪問国や都市の選定から現地での調査、ヒアリング計画などを自ら企画・調整して行われ、例年10名程度が参加している。

筆者は、2024年（令和6）度に「上野三碑を中心とした文化財を生かした地域活性化策の検討」をテーマとして本研修に応募し、2024年10月25日から11月7日の14日間、大韓民国（以下、韓国）各地を訪問する機会を得た。

文化財を生かした地域活性化策を検討するにあたり、韓国滞在中に実見した文化財や博物館施設等の現況とあわせて、韓国における文化財の保存活用の状況について、日本の事例との差異を一度整理する必要があると考え、当稿を執筆するに至った。

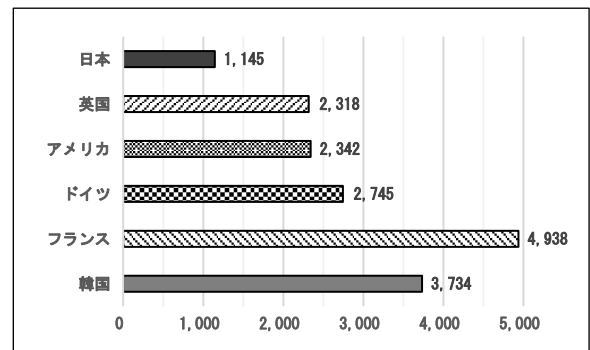
なお、日韓で表記の異なる用語が複数あるが、当稿での表記は原則として日本国内で一般的に用いられる用語を使用する。

1 韓国の文化施策の概況

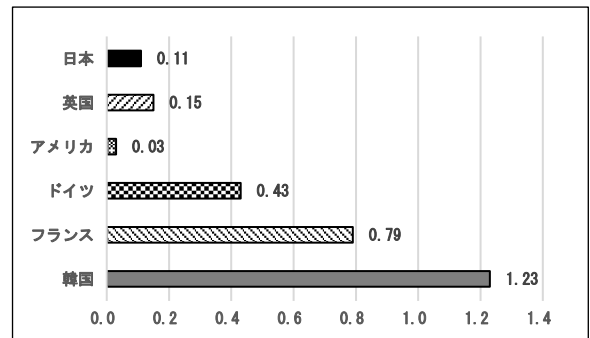
はじめに、韓国の文化施策について触れておきたい。韓国における文化施策の所管省庁は、文化体育観光部（日本の省に相当）であり、文化等に関連する産業振興を担う部局も包含している点が特徴的である。その中で、文化財行政を専門に担う外局として国家遺産庁（旧文化財庁）を持つ点が日本と大きく異なる。韓国における文化財施策が国家において重要な位置にあることを端的に表しているといえる。

2021年（令和3）度に、文化庁と獨協大学が共同研究事業として実施した諸外国の文化政策に関する資料によれば、文化支出に係る予算は日本の1,145億円に対し、韓国は3,734億円と3倍以上の差があり、国家予算に占める割合とし

ては日本0.11%、韓国1.23%とその差はおよそ10倍に達する（註1）（第1、2図）。国家によって、歴史文化に関連する事業が強く推進されていることが示唆される。



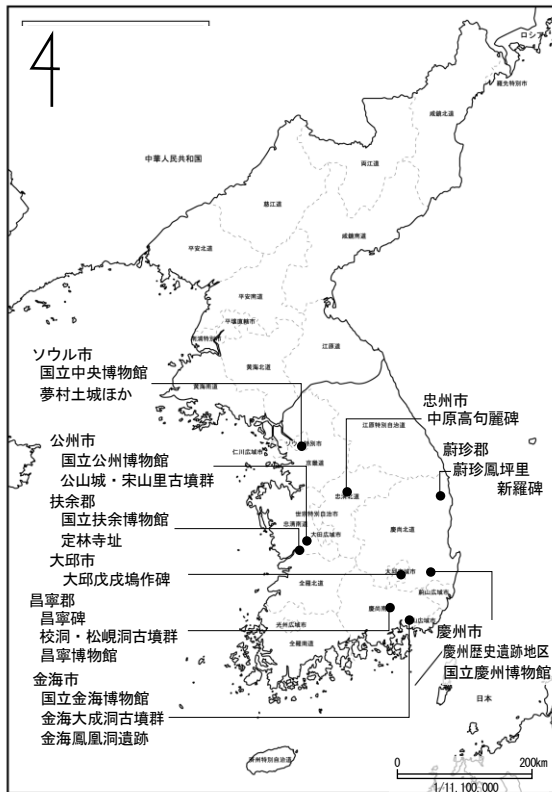
第1図 令和3年度の文化支出額（文化庁・獨協大学2021より作図）



第2図 令和3年度の文化支出額の国家予算に占める割合（文化庁・獨協大学2021より作図）

2 訪問都市と文化財等の状況

冒頭に示したとおり、本研修の主テーマを「上野三碑を中心とした文化財を生かした地域活性化策の検討」と設定し、主に韓国国内で発見された三国時代（古代）の石碑の保存活用について調査を行うことを検討していた。しかし、これらの石碑は、博物館に移設され展示されているもの、公園等の中に佇むものなど立地の状況は多様である。そのため、石碑の活用を検討するには、韓国における史跡等の整備状況や博物館の活用についてもあわせて把握する必要があると考えられた。そこで、幅広く文化財の保存活用状況について実見することとし、第3図に示した都市の史跡や博物館等を訪問した。以下では、訪問先の中から、石碑を中心として特徴的な史跡や博物館等の状況について紹介する。



第3図 訪問都市・文化財等の位置（概ねの位置）

（1）古代の石碑

韓国の古代の石碑は、かつての新羅の領域を中心に数多くみつかっており、水田内の石が石碑と判明した例、道路工事で偶然発掘された例など、原位置が不明なものが多い（註2）。そのため、博物館等に移設して保存・展示されている事例が大半である。一方日本では、江戸時代以降、神社や寺院の境内などで安置される例もあり、両国の石碑を取り巻く環境は大きく異なっている。そこで、石碑の保存活用状況という視点を中心に、各碑の概況を記したい。

①浦項中城里碑、南山新城碑、明活山碑、壬申誓記石（新羅） これらの石碑は国立慶州博物館に収蔵展示されている。韓国で最も古い石碑とされる浦項中城里碑（501年）は、独立した展示空間が設けられている（第4図）。その奥に南山新城碑や明活山碑など、慶州市近辺で発見された石碑が展示されている。自然石をあまり加工しない形状は、上野三碑の山上碑（681年）や金井沢碑（726年）に似ているが、これらの石碑は板状で、時代も1世紀以上古いものである。



第4図 慶州博物館内 浦項中城里碑

②新羅真興王拓境碑（昌寧碑）（新羅） 昌寧碑は、内陸の中核都市である大邱市から南へ40 kmほど下った盆地にある昌寧郡に所在する。石碑は、郡内の中心地から少し離れた萬玉亭公園内にあり、覆屋で保護されている。1914年（大正3）の発見時には、地元住民に洗濯石として使われていたとされ、金井沢碑に残る江戸時代の逸話と通ずるものがある（註3）。自然石をあまり加工しない姿形も金井沢碑によく似ているが、昌寧碑は幅179cm、高さ172cmと大きく、碑の形状も板状を呈する（第5図）。



第5図 昌寧碑

③大邱戊戌塙作碑（新羅） 大邱戊戌塙作碑は、慶北大学校博物館が所蔵する。博物館正面入ってすぐのロビーに現物がそのまま置かれている（第6図）。1946年（昭和21）に大邱市内の民家で発見されたとされ、建立年は578年と推定されている（註4）。厚さ約12cmと薄い形状で、他の新羅の石碑に類似している。



第6図 大邱戊戌塙作碑

④蔚珍鳳坪里新羅碑（新羅） 韓国南東部に位置する慶尚北道北東部の蔚珍郡に所在する。当碑は、水田耕作中に発見され、長らく覆屋が掛けられた状態で建てられていた。2011年（平成23）に、この石碑を中心とした展示館「蔚珍鳳坪新羅碑展示館」が整備された（第7図）。大都市からはやや遠い位置にあるが、年間2万人の来館がある（註5）。当館には古代碑の複製品が並べられた展示室のほか、御影石で実物大に再現された石碑の屋外展示場があり、朝鮮半島の重要な石碑を一同に紹介する韓国随一の石碑の総合展示館となっている。この屋外展示場は朝鮮半島の形を模していて、半島のどこにどんな石碑があるのかを体感することもできる。蔚珍鳳坪里新羅碑は、角柱状の姿形をしており、板状が多い他の新羅碑とは一線を画すが、碑文が1面にのみ記されている点では、新羅碑の特徴を有している。建てられた位置が新羅の北部であったため、高句麗の影響があったと考えられている（註6）。



第7図 蔚珍鳳坪新羅碑展示館 外観

⑤新羅真興王巡狩碑（北漢山碑）（新羅）

国立中央博物館に収蔵されている北漢山碑は、ソウル市近郊に連なる北漢山の峰（碑峰）に長らく据えられていた。文字の摩滅を防ぐため、1972年（昭和47）に国立中央博物館に収蔵された。石碑が建っていた場所には実物大レプリカが設置され、登山客の登頂記念スポットになっている。正面からの見た目や頂部がホゾ状に加工されていること、ホゾには従来笠石が冠されていたと考えられていること、碑文面以外の面の加工が荒いことなど多胡碑との共通点が多く見られる。一方、多くの新羅碑と同様北漢山碑が板状である点は、多胡碑とは異なる。



第8図 北漢山碑

⑥砂宅智積碑（百済） 国立扶余博物館に収蔵されている砂宅智積碑は、確認されている数少ない百済の石碑のひとつである。正面にアクリルパネルが置かれ、すぐ横に職員が常駐するなど厳重な管理体制が整えられている（第9図）。先述の新羅の多くの石碑とは異なり、角柱状を呈する。また、文字が大きく流麗な書体で碑文が彫られており、百済の石加工技術が高度化していたことを想起させる。



第9図 砂宅智積碑

⑦中原高句麗碑（高句麗） 韓国内で見ることのできる唯一の高句麗の石碑である（第10図）。忠州市によって展示館が整備され、忠州高句麗碑展示館として平成24年（2012）に開館した。展示館内に遺物等の展示はなく、解説や映像、写真等のみで高句麗の歴史をたどり、最後の展示室で石碑を見学することができる。この石碑は、4面すべてに文字が刻まれており、大きさは異なるが、同じ高句麗の石碑である広開土王碑との類似性が指摘されている（註7）。



第10図 中原高句麗碑

（２）史跡整備事業

韓国では、1980年代からいわゆる史跡整備事業が本格化し、特に90年代以降には文化遺産の観光資源化事業の活発化により、多くの復元整備事業が進められるようになった（註8）。以下、整備の手法や活用の仕方などの視点を中心に、いくつかの事例を整理しておきたい。

①金海大成洞古墳群（金海市） 金海大成洞古墳群は、2023年（令和4）に世界遺産に登録された、1世紀から5世紀にかけて築造された伽耶地域の古墳群である。墳丘部には、調査が完了した石室部分を、出土した遺物とともに復元し、上から見学できる展示室が整備されている。

さらに、墳丘上には石を用いた平面的な石室表現や、植栽を用いた埋葬施設の平面表示など、時代ごとに変遷する埋葬形態を視覚的に表現している（第11図）。古墳群のガイダンス施設として、大成洞古墳博物館が整備されており、博物館職員によるオリジナルキャラクターの制作など、ユニークな取り組みも行われている（第12図）。

この史跡は、犬の散歩やジョギングなどにも利用され、日本国内の史跡公園とよく似た光景が広がる。古墳群のすぐ西側を流れる小川に沿って緑地や公園も整備され、古墳群とともに地域の憩いの場になっている。



第11図 金海大成洞古墳群 植栽による石室表示



第12図 大成洞古墳博物館のキャラクター

②慶州歴史遺跡地区（慶州市） 慶州歴史遺跡地区は、2000年（平成12）に世界遺産に登録された新羅時代の遺跡群である。2005年（平成17）に策定された「新羅王京核心遺跡復元・整備計画」により、2034年（令和16）までに総額およそ1000億円の予算で、約140万㎡の史跡整備を行う壮大な計画である（註9）。地区内には多くの整備された史跡や展示施設があるため、整備活用などの観点から特徴的な事例をまとめる。

i）東宮と月池 新羅王宮の別宮である東宮と宮殿内最大の人工池「月池」で、3つの建物と月池が復元されている（第13図）。夜7時過ぎでも外国人観光客のほか、親子連れなども多くみられた。この月池には、水を流し込む吐出口部分や護岸用の石材に発掘調査で出土した本物の遺構が使用されている（第14図）（註10）。日本でも出土した礎石等を復元に用いた整備の事例はあるが、近年は調査した遺構は原則埋め戻して保存される（註11）。また、当時用いないとされる石材で、月池の周辺にいくつか小さな石庭が作られ、あたかも当時から存在するような演出が行われている（註12）。国内の史跡整備では、発掘調査で確認されていないものは、史跡指定地外に整備したり、明らかに後世のものとなるように整備したりすることが一般的である。慶州市の本事例においては、現代的な雰囲気づくりも考慮されているものと考えられる。

ii）月精橋 慶州歴史遺跡地区内南西側の月城地区に復元された大規模な木橋である（第15図）。発掘調査で礎石と瓦片が確認されたことで、この場所に屋根のある橋が架けられていたことが明らかになったが、過去にはこの復元工事の考証に関する問題が報じられたこともある（註13）。夜にはライトアップにより幻想的な雰囲気が醸し出され、新羅の偉大な王京「金城」（慶州の旧名）を象徴する壮大さがある。

iii）金冠塚 金冠塚では、完了した発掘調査現場をそのまま展示施設で覆い、見学できるように整備されている（第16図）。この施設は外側からでも内部を見ることができるようになって

いて、夜間は室内がライトアップされている。外からみたときの内部展示の演出という視点は斬新である。この古墳は、日本統治時代の開発とそれに伴う発掘調査によって大きくき損されたが、そういった歴史をも内包し、現在残された古墳の状況を踏まえた整備が行われている。施設内の解説で、展示施設自体を「21世紀の墳丘」と称しており、言い得て妙な表現である。

なお、慶州市では、金冠塚以外にも多数の古墳が整備されている。金冠塚など特殊な例を除くと、発掘調査を行った古墳も未実施の古墳も同じように墳丘が整えられ、一見した限りでは調査の実施・未実施の差を感じることはできない（註14）。日本では、史跡等の整備を行った後に整備事業報告書を作成し、いつ、どのように、どんな意図で、何の遺構の整備を行ったのかなどを広く公開することが通例となっている。一方、韓国では事業後に整備報告書のような資料を刊行することはほとんどないとされる（註15）。今後、整備の記録を作成・公開し、整備・未整備の状況なども明確にすれば、大規模な復元整備事業の周知やノウハウの継承などにも役立つであろう。

③ 昌寧校洞・松峴洞古墳群（昌寧郡） 昌寧校洞・松峴洞古墳群は、先述の昌寧碑のある昌寧郡に所在する古墳群で、金海大成洞古墳群と同じく世界遺産「伽耶古墳群」の構成資産である。古墳群の最も標高の高い地点から見下ろすと、その規模の大きさを実感できる（第17図）。墳丘だけでなく古墳群全体の整備が行われ、墳丘周辺にも芝張りがされている。韓国の古墳は日本の古墳と比較して墳丘の勾配が急峻であり、また山の斜面に築かれることが多いため、草刈などの維持管理が大変なのではないかと想起されたが、特に管理が困難という様子は確認できなかった（註16）

校洞古墳群には、隣接して昌寧博物館が設置されており、当地周辺の歴史を学ぶことができるようになっている。古墳1基を移築して整備したドーム型の別館「桂城古墳移転復元館」では、古墳の構造がわかるように色の違いを強調した盛土表現や、様々な角度から見ることのできる見学路の整備がなされており、古墳の構造を理解するのにわかりやすい展示がつくられている（第18図）。



第13図 東宮と月池（慶州歴史遺跡地区）



第14図 月池取水部（慶州歴史遺跡地区）



第15図 月精橋（慶州歴史遺跡地区）



第16図 金冠塚（慶州歴史遺跡地区）



第17図 昌寧松峴洞古墳群



第18図 桂城古墳移転復元館内部の様子

④百済歴史遺跡地区（公州市・扶余郡）

2015年（平成27）に世界遺産に登録された百済歴史遺跡地区のうち、公州市と扶余郡はいずれも百済（熊津・泗沘期）の都が遷都した町である。

公州市では、公山城や武寧王陵（宋山里古墳群）など百済時代を中心とした史跡等の整備が進み、修学旅行とみられる子どもたちの姿も多く見られる。環状交差点の中央には武寧王の像が鎮座し、道には武寧王陵の石室をモチーフにした門が整備されるなど、百済時代の歴史を街の象徴として重要視している様子も伺える（第19図）。一方、扶余郡では、定林寺址等の環境整備などが多少行われていたが、人影はまばらであった。扶余郡の郊外には、歴史テーマパーク「百済文化団地」という大規模な観光施設が整備されている。各発掘調査の成果を生かして、史跡そのものではなく、この文化団地を中心にかつての百済国の歴史的空間を整備しているようである（註17）。



第19図 武寧王陵堰門（奥に武寧王像も見える）

⑤ソウル夢村土城（ソウル市） ソウル夢村土城は、ソウル市にある百済時代（漢城期）の城跡であり、百済、新羅、高句麗の相克の歴史を刻む。1988年（昭和63）のソウル五輪のメイン会場として、城の内外に様々なスポーツ関連施設が建設された。その後、城跡とその周辺が五輪公園として整備され、多くの人々が集う憩いの場所となっている。公園内には2012年（平成24）に漢城百済博物館が整備され、ソウルの先史時代の遺物や、漢城での百済建国から発展までの歴史が紹介されている（第20図）。

漢城期百済における枢要な城があった場所が、ソウル五輪の開催という韓国の歴史における重要な舞台になっており、当地の歴史の重層

性が垣間見える。まさに過去（百済）と現代（韓国）をつなぐ史跡であると言える。



第20図 漢城百済博物館 外観

（3）博物館

韓国の文化財系の国立博物館は14館あり、日本の5館（国立文化財機構所管）に比して多く、人口や国土面積の差を考えるとその充実度が伺える。「韓国の博物館は、歴史や伝統文化の重要性や民族の誇りを国民に教育するところからスタートしてきた。」（註18）とされるように、博物館を国民のアイデンティティ創出のための装置として機能させてきたという歴史も影響しているとみられる。国立博物館の入館料が基本的に無料であることも、これらの考え方に基いていると考えられる。国立博物館には「子ども博物館」と呼ばれる施設が併設されており、幼い頃から遊びを通して自国の歴史に触れる機会が提供されている。これも韓国の博物館運営の充実度を示す一つの事例であるといえる。また、ソウル市漢城百済博物館にも子ども博物館がオープンした事例など、地方自治体においても同様の取り組みがみられる。

各博物館の展示の特徴としては、見学者に訴える表現方法が多様であることが指摘できる。一例として、国立慶州博物館では、国宝に指定されている金冠が透明なケースに収納され、吊るしたような状態で展示されており、様々な方向から見る事ができる工夫がされている。透明なケースの前後に立つと、まるで金冠を被っているような写真を撮ることもでき、見学者の印象に残りやすい手法である（第21図）。また、国立中央博物館内にある「思惟の部屋」は、国宝の半跏思惟像2体のためだけの広大な展示空間である（第22図）。照明を抑えることで、仏像が浮かび上がっているような幻想的な空間を

創出している。この部屋では展示解説員による解説も禁止され、博物館全体で「思惟の部屋」の荘厳な雰囲気維持に努めている（註19）。

これらの事例のように、空間全体で文化財の価値をわかりやすく表現し、見学者が体感できるような演出が多くみられる。



第21図 国立慶州博物館 金冠展示の様子



第22図 国立中央博物館 思惟の部屋

3 韓国における文化財の保存活用の指向

実見した史跡や博物館展示等を総括してみると、韓国では文化財の価値を利用して人を集めることを主眼に置き、そのための見せ方・表現方法の技術や知見を高めていると考えられる。

史跡整備を行う際には明確な着地点を想定し、それに合わせて遺構の復元や公園整備を行い、歴史的な空間をつくり上げようとする意図が強く表れている。慶州市の史跡整備では、郊外に鉄道の新線が開通すると、新羅王京エリアを縦断して市街地に乗り入れていた旧線を廃線にしてまで、歴史的空間の復元に取り組んでいる（註20）。

博物館の展示においても、自国が誇る文化財を多くの人びとの記憶に留めさせようという意気込みが表現されている。天井まで届くような大胆な展示、照明などを活用した空間演出に

よって、一目で文化財の美しさ、貴重さなどを体感できるような工夫がなされている。また、石碑のような静的な展示物には、プロジェクションマッピングを投影したり、多言語対応のアプリケーションを充実させたりするなど、デジタル技術の積極的な利用により、その価値の発信に努めていると考えられる。

このような技術や手法の多様さは、とりわけ国立施設において強く表れているように見て取れる。文化財を生かして経済的利益を得ようとするのみならず、国家や地域の価値や存在感を高めるイメージ戦略の一環としても文化財が活用されているものと考えられる。冒頭に示した文化予算の充実度は、こうした国家的戦略も背景にあるものと推察されよう。

4 日韓の文化財の保存活用の差異

一方、今日の日本における文化財の活用は、その価値を利用して人を集めようというよりも、むしろ地域の個性を生かす手段のひとつとして進められてきた事例が大半であろう。そのため、それぞれの文化財が持つ歴史的な文脈も踏まえた活用手法も重要な視点とされてきた（註21）。これは、史跡等の整備事業で現状の生活環境が激変しないよう過去と現在のバランスを考慮した計画が検討されることや、石碑などの保存において、現在置かれた場所にも意義が見出されて価値付けがなされていることなどからも看取できる。

史跡整備事業などを理由に鉄道が移設・廃線された韓国の慶州市に対して、日本では奈良市の平城宮跡を横切る近鉄電車も歴史の一部であり、奈良を象徴する景観として捉える考え方も広まりつつあり、両国の考え方の違いを体現しているといえる（註22）。

このような視点を踏まえると、歴史上のあるべき姿を取り戻そうとする韓国、過去と現在が調和するよう現状の最適解を導く日本、という両国の文化財への関わり方の違いを見出すことができる。

5 結語

以上、筆者が訪問した韓国各都市にある石

碑や遺跡、博物館等の施設を訪問して、主に見学者の視点からその保存活用の一側面について私見を述べた。

日韓両国における文化財の活用のあり方を概観すると、文化財そのものの価値や存在感、特別感によって見学者を呼び込む観光資源とするか、文化財が地域の学習・憩いの場等として機能し、地域のシンボリック的存在とするかという2つの大きな要素に集約されている、と指摘できよう。そして、韓国では文化財によって歴史を空間として体現させ、訪れた人びとに共有させることを重視しているのに対し、日本では積み重なった時間の流れの共有を指向する傾向があると総括できる。この方法論の違いが、両国の文化財の活用施策における最も大きな差異であると考えられる。

今後は、これらの状況に対して客観的な評価を加え、より精緻に日韓における差異を見出していきたい。これにより、両国の施策の強みを組み合わせ、文化財の保存活用策ひいては新たな地域活性化の施策の提案に繋げていきたいと考えている。

付記

当稿執筆のきっかけとなった高崎市姉妹都市等海外派遣研修の参加にあたり、以下の方々に多大なご支援、ご協力を賜った。末筆ながら、記して感謝申し上げる（敬称略、順不同）。
高久健二 小林孝秀 李恩碩 李在煥 李東奎 沈賢容 朴美貞

【註】

- 1) 文化庁・獨協大学2021『令和3年度 文化庁と大学・研究機関等との共同研究事業 新型コロナウイルス感染症の影響に伴う諸外国の文化政策の構造変化に関する研究』報告書・サマリー版 文化庁
- 2) 小倉慈司、三上喜孝編2018『古代日本と朝鮮の石碑文化』朝倉書店
- 3)、4) 現地の解説等による
- 5)、6) 沈賢容氏ご教示
- 7) 3に同じ

- 8) 金哲主、卓京柏2011「韓日における文化財政策の変化と史跡整備に関する研究」『奈良文化財研究所学報87 日韓文化財論集Ⅱ』（独）国立文化財機構奈良文化財研究所
- 9) 慶州市2013 사진에 담긴 시정「신라왕경 핵심유적(신라왕궁 등)복원 ‘역사적인 합의」2013/10/21 https://www.gyeongju.go.kr/mayor/page.do?step=258&parm_bod_uid=92128&srchEnable=1&srchKeyword=&srchSDate=&srchColumn=&srchVnoteType=-1&pageOrder=0&parm_mnu_uid=1334&pageNo=1&srchBgpUid=-1&pagePrvNxt=1&pageRef=0&srchEDate=&mnu_uid=1413&（参照2025/5/21）
- 10) 李恩碩氏ご教示
- 11) 文化庁文化財部記念物課監修2005『史跡等整備のてびき』同成社
- 12) 10に同じ
- 13) [천년古都 훼손될 위기] [中]발굴 때 나온 목재·기와 근거로 누각형태 다리로 추정하고 복원 朝鮮日報 2016/8/30 https://www.chosun.com/site/data/html_dir/2016/08/30/2016083000341.html（参照2025/6/4）
- 14) 10に同じ
- 15) 8に同じ
- 16) 各地での聞き取り等による
- 17) 現地のパンフレットなどによる
- 18) 植野浩三2005「韓国博物館の現状」『総合研究所所報』13号 奈良大学総合研究所
- 19) 展示解説員の説明による
- 20) 10に同じ
- 21) 11に同じ
- 22) 奈良文化財研究所2014「平城宮跡を横切る近代遺産」なぶんけんブログ 2014/11/4 <https://www.nabunken.go.jp/nabunkenblog/2014/11/20141104.html>（参照2025/6/4）